

---

ジェフ・ウォールの越境戦略再考——「絵画／写真」と「映画／写真」の非等価性をめぐって

北桂樹(京都芸術大学)

---

メディア横断的表現が広がる現代において、1970年代以降の写真の戦略モデルの再考は、今日の実践に対する理論的支柱を問い直す契機となる。本発表では、写真と他メディアとの境界を攪乱するジェフ・ウォールの実践に着目し、とりわけ「絵画／写真」と「映画／写真」という二種のメディア越境が果たす役割の非等価性を手がかりに、ウォールの戦略モデルを構造的に再定義することを試みる。

これまでのウォール論では「タブロー形式」や「シネマトグラフィ」といった用語を通じ、写真における新たな視覚言語の創出として評価されてきた(アリエル・ペレンク、ティエリー・ド・デューブ、調文明など)。その際、両者の越境は等価に並置され論じられる傾向が強かった。本研究はそうした先行的議論に加え、ウォール自身の発言やインタビュー、特に2024年のバイエラー財団美術館における個展を機に行われた最新の言説を参照しつつ、両者を「コンセプト」と「戦略」という異なる機能に切り分けることで、その構造的な非対称性に光を当てる。

「絵画／写真」の越境は、写真がグリーンバーグ的なモダニズム批判の中で周縁化されていた状況に対する応答であった。つまり、写真に芸術的自律性と不透明性を獲得するため導入したコンセプトの実践である。その目的は、写真を絵画的形式に転位させることではなく、むしろタブロー形式の枠組みによって、写真固有の美学を制度的に再配置することにある。

一方、「映画／写真」の越境は、照明設計、役者の配置、演出など、映画制作の技術的要素を写真に導入する「シネマトグラフィ」として実践された。これはタブロー形式の実現を支える方法論として機能し、目的ではなく手段として機能した。

このように、「絵画／写真」は制度に対する批評的応答としての概念装置であり、「映画／写真」はそれを視覚的に成立させるための方法論である。両者を非等価なものとして捉えることで、ウォールの実践を制度批判的な構造を備えたモデルとして再構成できる。この視点は、写真というメディアが制度的にいかに関与づけられ、また他メディアとの関係においてどのように戦略化されるかを考察するうえで示唆的である。

本発表は、こうした構造的整理を通じて、ウォールの越境的実践がいかにしてポスト・メディア時代の視覚芸術における制度的自律性の確保と、新たな参照可能性の構築に寄与するかを明らかにするものである。ウォールのこの戦略モデルは、ポスト・メディア状況における新たな表現の地平を切り開く試みであり、2010年代以降、ルーカス・ブレイロックやオーウェン・キッドなどの作家に影響を与えている。本研究は、ウォールの視覚戦略を構造的に読み直すことで、美術と写真の制度的境界を問い直しつつ、非領域化の理論的展開を深化させ、ポスト・メディア時代における視覚芸術の制度批判的実践に資する視座を提供するものである。